

平成二十六年年度

総合問題

(文学科 日本語日本文学専攻)

9:30
～
11:00

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、問題冊子、解答用紙に手を触れてはいけません。
- 2 この問題冊子は12ページで、解答用紙は2枚あります。
- 3 試験開始の合図があつたら、まずページ数、枚数を確認し(足りない場合は、手を挙げて監督者に知らせること)、全部の解答用紙に受験番号を記入してください。
- 4 試験中に、印刷の不鮮明な箇所やページの脱落などに気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 5 解答は、解答用紙の所定の欄に記入してください。
- 6 この問題冊子にある余白のページは、下書きなどに利用してかまいません。
- 7 試験終了後、問題冊子と受験票は持ち帰ってください。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【省略】



【省略】

(ミル著、斉藤悦則訳『自由論』二〇一二年、光文社、139～144ページより)

問一 ——部①～⑤の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問二 ——部ア「このフンボルトの言葉の意味が理解できる人は、ドイツ以外の国ではほとんどいない」について、「フンボルトの言葉」の内容と、それに対するミルの考えを、本文の言葉を用いて一〇〇字以内で説明しなさい。

問三 ——部イ「人類が経験によって得た成果」とほぼ同じ意味で使われている語を本文中から十二字で抜き出しなさい。

問四 ——部ウ「そういう推定」とはどのような推定か、本文中の言葉を使って五十字以内で説明しなさい。

問五 ——部エ「猿のような模倣能力」を本文中の語を使って簡潔に説明しなさい。

問六 ——部オの「文明度の高い地域に現在住んでいる男女」が「自然が育てうる存在のなかで明らかにもっとも弱々しい種族」なのはなぜか、その理由を本文の内容に即して五十字以内で述べなさい。

問七 『自由論』が出版された一九世紀の半ばは、欧米でも日本でもさまざまな社会の変革が起こりました。この時期（一八三〇年代～一八六〇年代）に起こった日本史、世界史上の主な出来事を二つ挙げなさい。

問八

次の漢文は本文——部Aの段落を中国の思想家の嚴復が一九〇三年に漢訳したものです。これを読んで、(1)～(4)の問いに答えなさい。

身為^ハ文明之民^ト、^B將不獨所行者為不可忽也。其^レ所以^ニ行之者、尤^モ不可^ニ苟然^ト也。^C今夫生人之業、所謂^{イハ}繼^ギ善成^レ性以^テ事^ル天者、能^キ理^ニ万物^ヲ而整^ツ齊^シ修^ム美^{スル}之^レ也。然其事必以^テ修身成^レ物為^ニ之本^ト。

(ミル著、嚴復訳『群己權界論』より作成)

注 苟然……おろそかだ。なおざりだ。

生人之業……人間たる者のつとめ。

成性……性格を完成させる。

成物……自分以外の物事に対して貢献する。

(1) ・印で示した「所以」「能」の送り仮名を含めた読みをそれぞれ記しなさい(現代仮名遣いでもよい)。

(2) 削除

(3) 削除

(4) ——部Cは中国の伝統的な価値観が含まれているため、本文の内容とはニュアンスが異なっています。両者の相違をわかりやすく説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

【省略】

【省略】

(秋山虔「『源氏物語』の成立」新編日本古典文学全集『源氏物語』①、
一九九四、小学館、3～6ページより作成)

注1 散佚……散逸に同じ。まとまっていたものが散らばってなくなることを。

注2 狂言綺語観……仏教の価値観によって文学や芸能を罪悪と見なす考え方。「狂言綺語」は道理や真実を離れ、人の心を惑わす、巧みに飾り立てた言葉の意。

問一 ——部①～⑤の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 ——部あ～おの語または文を現代語訳しなさい。

問三 ——部ア～ウについて、例にならってそれぞれ文法的に説明しなさい。

問四 ——例 見いだしてゐたる 動詞「見いだす」の連用形活用語尾と接続助詞「て」
——部A「装飾過多の文章」とあるが、本文中に引用された『三宝絵』序文に使われて
いる修辞技法を二つ、例を挙げて指摘しなさい。

問五 ——部B「敬語が用いられている」とあるが、その理由はなにか、簡潔に説明しなさい。

問六 ——部C「消閑の具」と同じ意味で使われている語を本文中の古文から抜き出しなさい。

問七 — 部D「モノガタリ」と片仮名表記になっているのはなぜだと考えられるか、あなたの考える理由を七十字以内で述べなさい。

問八 — 部E「歴とした著作に値するものではない営みであった」とはどういうことか、本文中の語を利用して五十字以内で説明しなさい。

